寝屋川キリスト教会

戻ってきた！(ルカ 15:11-32)

1. 父から離れ、戻った弟(15:11-24)

このたとえは神と私たち人間との関係をよく表しています。父親が神でありイエスご自身です。そしてふたりの息子はわたしたち人間です。私たちは神によって造られ、神のそばにいて幸せに暮らすはずでした。ところが私たちの心は神から離れ、自分勝手に歩んでいるのです。

しかし弟はどん底の状態になったとき、われに返って悔い改め、父のところに戻っていったのです。弟は自分が犯した罪の大ききのゆえに、息子の資格を失ったと考えていました。ところが父親は悔い改めて戻ってきた弟を無条件で許し、ふたたび息子として受け入れたのです。そして肥えた牛一頭を屠って大きな宴会を始めたのです。

ここまでは先週見た2つのたとえと同じ展開です。なくなっていたもの(今回は人)が見つかったので喜びを分かち合う様子が描かれています。強調点も同じで、罪人が悔い改めて神に立ち返り、元のあるべき所に戻ってきたとき、天において御使いたちの間に大きな喜びがわき起こることを表しています

神の元を離れて自分を見失って苦しんでいる私たちが、悔い改めて神の元に返ってくることを神は待ち望んでいます。神は悔い改めて神に立ち返った者を無条件で赦し、受け入れてくださるのです。この箇所には神の慈しみ深い愛が描かれています。

2. 父のそばにいた兄(15:25-32)

ところが話はここで終わりません。畑から帰ってきた兄が、家の方が賑やかなことに気づき召使いに尋ねると、召使いは「弟さんが帰ってこられたので、ご主人が肥えた子牛を屠ってパーティーを始めたんです」と答えました。それを聞いた兄は怒って家に入ろうとしなかったため、父親が家から出てきて、兄をなだめました。その時兄は「長年の間、私はお父さんにお仕えし、あなたの戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しむようにと、子やぎ一匹下さったこともありません。それなのに、遊女と一緒にお父さんの財産を食いつぶした息子が帰って来ると、そんな息子のために肥えた子牛を屠られるとは」と言いました(15:29-30)。

弟がどんなふうに散財したのかは分かりません。遊女に費やしたかどうか兄は何も知らないはずですが。それなのに兄は怒りのあまり、そうに違いないと決めつけています。それに対して父親はこう答えました。「子よ、おまえはいつも私と一緒にいる。私のものは全部おまえのものだ。だが、おまえの弟は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのは当然ではないか」(15:31-32)

この兄は罪人が悔い改めても喜ぶことができない律法学者やパリサイ人を表しています(15:1-2)。イエスの元に話を聞こうと取税人や罪人(売春婦や病人、障害者)が集まってきたのです。彼らがイエスの元にやってきたのはイエスが「聞く耳のある者は聞きなさい」と言ったからでした(14:35)。ルカ 12 章の最後から 14 章までの箇所、イエスはイスラエルの一般の人々に対して、神が悔い改めを願っていることや、イエスの弟子になるために必要な覚悟や決心について教えていました。

それに応じてイエスの元に人々から嫌われていた取税人や罪人がイエスの話を聞こうと集まってきました。彼らは自分たちが得ていた豊かな生活や家族との関係を脇に置いてイエスに従う決心をし、弟子になろうとしてやってきたのです。彼らはまさに悔い改めたのです。目の前の幸せや豊かさよりも、もっと大切なことがあると気付いたのです。

ところが律法学者やパリサイ人は聖書の教えを誰よりもよく知っていたのに、罪人が悔い改めたことに全く関心を示さず、イエスが彼らと一緒に食事をしていることを非難しました。

兄は父にこう言っています。「ご覧ください。長年の間、私はお父さんにお仕えし、あなたの戒めを破ったことは一度もありません」(15:29)。この「仕える」という言葉は原語では「奴隷として仕える」という意味です。兄は父親に受け入れられるために一生懸命仕えようとしていました。父の元を離れず真面目に働いてきたのです。だから大きな損害を与えた弟を無条件で受け入れた父を許せなかったのです。

兄の姿は素晴らしいものだったかもしれませんが、しかし兄の心は父から離れていました。弟は自分の欲望のまま生きていた罪人でしたが、その反対にいて厳しい生活を貫いてきた兄もまた罪人だったのです。律法学者やパリサイ人は真面目で厳格な生活を自分に課して、神に仕える者はこうでなければならぬと考え、自分たちが罪人であるという自覚はありませんでした。その結果、彼らはイエスを策略にかけて十字架で殺したのです。たとえに合わせるなら、兄が自分の正しさを示すために父を殺すという恐ろしい結末になります。

このたとえは神の愛の素晴らしさを示していますが、同時に人間が自分勝手に高慢な者であることを示しています。神は弟だけではなく兄の悔い改めも求めているのです。

私たちは弟のように神の元を離れて生きていましたが、神の憐れみ深い愛によって赦され、神の子の特権をいただきました。ところが私たちはその恵みを忘れ、兄のように自分を正しい者と考えて他の人をさばく高慢さがあることも認めなければなりません。私たちは弟のように赦された者でありながら、兄のような弱さも持つ者でもあるのです。

だからイエスの愛によって、赦された恵み、受け入れられた喜びがどれほど素晴らしいことを忘れないでください。パリサイ人や律法学者のように人を見てはいけません。人を見ているとつまずきが起きます。人ではなく神を見るべきなのです。